県外派遣報告書

審判員名	坂本　秀樹	所属　　高体連
大　会　名	第56回全国高体連審判研修会及び平成27年度全国高等学校総合体育大会	
期　　間	平成27年7月25日（金）～29日（水）	
会　　場	島津アリーナ、ハンナリーズアリーナ（京都市）、横大路運動公園体育館	

スケジュール

期　　日	内　　容	場　　所
7月25日（土）	①第56回全国高体連審判研修会開講式	京都テルサ　東館
7月26日（日）	②班別トレーニング、モデルゲーム	ハンナリーズアリーナ
7月27日（月）	③班別トレーニング、モデルゲーム、閉講式	島津アリーナ
7月28日（火）	④審判会議	京都テルサ　東館
7月29日（水）	⑤1回戦　女子　和歌山信愛－岡山就実	横大路体育館

①第56回全国高体連審判研修会開講式

「信頼される判定をするため」～ルール、マニュアルの正しい理解と適用～というテーマで、講師：渡邊整氏から全体講義が行われた。研修会に臨むにあたっては、日ごろ地元での活動、取り組みがあった上で、割り当てられた1つ1つのゲームに対して丁寧な姿勢、真摯な姿勢であるべき。大会に臨んでは、いろんな人の思いが集まっている大会であること。冷静に、公正に、公平にコート上に立ち続けてもらいたい。一方のチームにだけ〇〇ということのないように、同じことが起きたら同じ対応をすること。その他、審判員としての言動・体調管理についても言及された。

班別ミーティングでは、清水氏、宇治原氏からの提案で、研修会ではどんなことを取り上げてほしいか意見をまとめた。それに基づいて翌日以降のトレーニングメニューを決めていただけるとの事。具体的にはエリア3の見方、ペイントエリアの攻防、スクリーンの見方・判定が課題にあがった。

②班別トレーニング、モデルゲーム

1日目	期　日	7月26日（日）	会場	ハンナリーズアリーナ

トレーニング内容　　講師：　清水　幹治　氏　・　宇治原　尚彦

①アップ
②まずは笛を鳴らす
　→リード、トレイルに分かれて空動きで判定をする
③オールコートでの2対2
　→ボール運びに対する追従と、次のレシーバーを視野に入れておく準備
④トレイルからリードに入る動き方
　→ショット、リバウンドをペネトレイトして確認してから、プレーを肩越しに見ながらリードへ入る。どのようなショットで終わろうとしているかを感じながら位置取りを変える。

⑤オールコートの4対4（1往復）

判定するというと「ファウル」の判定にばかり注意がいく研修生が多かったとのこと。ヴァイオレーションが起こってから、ファウルということがあるのに、ヴァイオレーションが見逃されては忍びない。何か1つに捉われるのではなくゲーム全体の、プレー全体の判定力を養う。

追従の練習というと、追従の1対1にばかり目が奪われている。実際のゲームの中では、レシーバーのところがおろそかになってはならない。分解練習ではあるが、当然、イメージを持って臨んでいなければならない。

②モデルゲーム				
1日目	期　日	7月26日（日）	会場	ハンナリーズアリーナ
対戦カード	育英（兵庫）ー県立山形南		講師：　宇治原　尚彦　氏	

主審：坂本　副審：寺田　雄一　氏（島根）	＜ゲームを終えて＞
・プレカンファレンスでは、自分の目の前のエリアがおろそかにならないように再確認。 ・同じプレーには同じ対応をし続けること。判定基準の一貫性。 ・ディフェンスの変化があった時への対応。	・見よう見ようとする意識が強すぎて、一方のチームの「手」の使い方に執着してしまった。ゲーム全体を見なくてはならなかった。 ・手を使ったオフェンスファールの判定は良かったとのこと。一方で、ベンチ管理を含めて、うまくまとめる方法、対応があったはず。

②C・D班合同講義
「良いレフェリーになるため」という観点で、NBL等の動画を使いながら行われた。審判はさまざまな情報を入れるためにアンテナを高くはるべき。片方のコーチとだけ話していると、一方のコーチ・観客から不満が出るだろうケースも映された。Honest（嘘をつかない）、Reliable（頼れる存在）、Hardwoking（一生懸命）、これが当然審判としてあるべき姿。その他、Not noticed（目立たない）、Right decision（適切な判断）など、言葉としてあげていかれると目指すべき姿が鮮明になった。

③班別トレーニング、モデルゲーム、閉講式				
2日目	期　日	7月27日（月）	会場	島津アリーナ
トレーニング内容			講師：　清水　幹治　氏　・　宇治原　尚彦	

①アップ ②ハーフコートの2対2 →リードとトレイルが役割分担をしながら必要なことを判定する ③ハーフコートの2対2「ポストの争い」 →ペイントエリアにボールが進む際に、どこまでが許されるコンタクトで、どういった場合にファウルとして取り上げるか、プレーの見方について	④オフェンスのon ballに対するスクリーンの判定 →ディフェンスが見える位置にセットされたのか見えない位置でセットされたのか。また、スクリーンが動きながらセットしているのかを、どこでどの角度から審判が見ていると、判定に説得力が出るか。 この班のメンバーが決定したときに、トレーニングで取り上げてもらいたい課題が「ポストの争い」と「スクリーンに対する判定」だった。講師のアドバイスを受けながら、同様のシチュエーションを繰り返すことで、良いものと悪いものの峻別が班全体で共有できるようになった。これを実際のゲームに反映できるかは、さらに技術の理解を深めないといけないとの助言があった。

④審判会議
吉田利治日本協会審判委員長、相原伸康氏から諸注意があり、宇地原尚彦氏から割り当て発表。 このインターハイというのは非常に多くの人から注目されている大会である。 全ての行動に責任を持って。「見られている」ということを認識するように。

⑤1回戦				
２日目	期　　日	7月29日（水）	会場	横大路運動公園体育館
対戦カード	和歌山信愛　ー　岡山就実		主任：　柏原　琢磨　氏	
主審：紀伊孝哉　氏（佐賀）　副審：坂本秀樹（埼玉）				

・最初から最後までクロスゲームの中で、二人の協力がなされ、判定のちぐはぐさも見られず、選手がプレーに集中できる環境を提供していた、とのコメントをいただいた。
　→初日までの研修会を経て、基準が頭の中で整理されていたことが大きいと感じた。
・いくつか「動きながら」の判定があった。ファウル自体の判定が正しいが、やはりより「良い位置」での判定が説得力を生む。相手審判とストレートラインにならないように、パートナーがどこで、どのプレーを見ているのかをもう少し意識する必要があった瞬間があった、とのこと。
　→とにかく「自分のエリア」ということを重視しすぎた時間があったと思う。

全体を通して
０８埼玉インターハイで1回戦を吹かせていただいたとき以来のインターハイであった。当時は審判研修会に携わる機会もなかったので、初めてのインターハイという気持ちであり派遣される前から非常に緊張感が続いた。いろんな環境、立場にある審判員が一堂に会しての研修会では、課題もそれぞれ違うにせよ、命がけでこの場に臨んでいることが改めて感じられ、インターハイ審判研修会の意義が大きいものに思えました。研修会、モデルゲームで判定基準を明確化しておいたからこそ、本番の1回戦がすっきりと吹くことができました。裏を返せば、自分の判定基準の一貫性が危ういということを表していますので、一層ルールの理解・技術の理解を深めていく覚悟をしました。 　京都府バスケットボール協会、京都府高体連の方々には準備段階から大会当日まで細部にわたり配慮いただき助かりました。ありがとうございました。そして、貴重な機会を設けていただいた講師の先生方にも感謝申し上げます。それとともに、地元埼玉においては自らが講習会を開く立場であることを記憶しました。伝えていかなければいけない点、継承すべきことが多々あります、その責務も感じています。 　多くの方に、インターハイ派遣の件を気にかけていただきました。膨大すぎて貴重すぎる経験でしたので的確な返答・返事ができませんでした、すみませんでした。派遣したいただいた埼玉県の皆様へも感謝申し上げます。この経験が再び「始まり」だと思います、ありがとうございました。